

音楽実践による近代建築の保存活用とコミュニティの形成

—旧グッゲンハイム邸を事例に—

北島拓（大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程）

本発表では、近代建築における音楽実践とそれによるコミュニティの形成が、Living Heritage としての近代遺産の保存活用にも意義を持つことについて明らかにする。

神戸市垂水区塩屋町にある旧グッゲンハイム邸は、明治末期に異人館として建設されたコロニアル様式の洋館であり、2007年に森本家が建物を取得して以降は、ミュージシャンでもある森本アリ氏が管理人を務めながら、撮影や結婚式などの個人使用に加えて、音楽ライブを中心としたイベント会場としても積極的に活用されている。発表者は、昨年6月から同地でフィールドワークを実施しており、とりわけこの場所での音楽実践に着目することで、歴史的な建物を主体的かつ柔軟に使用しながら、独自のコミュニティが育まれている様子を目の当たりにしてきた。ここでは、その調査結果に基づきつつ、音楽実践によるコミュニティの形成が、近代建築の保存という社会的目的に対しても重要な意義を持つことを報告する。

音楽実践が媒介したコミュニティの様相に関する研究については、現在までに豊富な蓄積が見られる〔アサダ, 2018, 小泉, 2013など〕。なかでも、あるライブハウスにおいて「常連」が「生きられる場」を構築する過程を詳らかにした生井達也〔2022〕の研究からは、特定の場所と結びついた音楽のコミュニティが、人々の継続的な参加を通じて形成・維持されることを認めることができよう。

他方で、近年の文化遺産研究においては、Living Heritage に関する議論が注目を集めしており、そこでは、「連続性」や「コミュニティ」といった視点から遺産を特徴づけることで、遺産の生きた側面を重視する姿勢が強調されている〔Poulios, 2011, Wijesuriya, 2018〕。この Living Heritage の議論は、幅広い遺産に応用可能なものとして想定されており、洋館の保存という本研究の事例に対しても十分に適用できると考える。

以上のことから、本発表では、旧グッゲンハイム邸における音楽実践について具体例を提示しつつ、そこで形成されるコミュニティの様相と、Living Heritage としての近代建築の保存活用の現状を示したい。なお、ここで紹介する音楽実践としては、同地を拠点に活動するプラスバンド「三田村管打団？」の定期公演や、参加者が印象深い楽曲を紹介しあう企画「ところで最近なに聴いてます？」、さらには同地におけるレコーディングを予定しており、いずれも「管理人＝ミュージシャン」の独自性が反映された取り組みとして興味深いものである。